仮面ライダーVS仮面ライダー　原典×リ・イマジネーション

こばちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーＶＳ仮面ライダー　原典×リ・イマジネーション

【Ｎコード】

Ｎ８６４６Ｙ

【作者名】

こばちゃん

【あらすじ】

西暦２０１３年。怪人との戦いは終わっていなかった……

人類全体が人を超えようすることに怒る神と天使（アンノウン）

餌に狩られる事を恐れ、鏡の向こうから無作為に襲ってくる怪物（モンスター）

自分達とは異なる進化を遂げていく人類を劣等種と主張する進化した人類（オルフォノク）

最大の敵が更に強くなると知り、三度目のバトルファイトで力を得ようとする始祖（アンデッド）

宇宙からの来訪者（ネイティブ）と追う者（ワーム）
現代を自分達の存在する時代に変えようとする未来人（イマジン）
別の未来では無くなった生命を現代に求めて来たネオ・ファンガイア
売人（ミュージアム）も生産者（財団X）もいないのに流通するガイアメモリ
八〇〇年の封印から目覚めた欲望（グリード）

仮面ライダーディケイドが破壊した『世界の融合』。しかし世界は
新たに『同調』を始めた。
同調から生まれた歪み（ダークライダー）。
時に協力し、時に敵対する怪人。
人類は英雄（生け贄）と救世主（仮面ライダー）を求める。

第一話　天の道を往き、総てを司る男（前書き）

テーマは『英雄になる者』『現れろ救世主』
この作品はノンテロップ・ノリと勢いでお送りします。
スペックはガン無視。ファイズがオーズの必殺技に耐えてもそれはＪｕｓｔｉφｓ！

第一話　天の道を往き、総てを司る男

日本の首都、東京。ここは仮面ライダーと怪人・怪物が戦う地だがそれを知るものは少ない。

夜、オフィス街の長い路地裏。一人の女子高生がケータイのキーを両手の親指で押しながら歩く。液晶の光りは女子高生の顔をうっすら燈すが視線は画面のみを捉えており、躓くことなく足は動く。

コツ、コツ……

――？

後ろから大きな靴音が鮮やかな赤を反射するピアスが刺さった耳に入る。

そちらを振り向いたが元々暗い路地裏。表情が見える事はなく、やや線が太い――悪く言えば太ってる――人がいるくらいしか解らなかった。

女子高生は警戒心から緊張気味になる。この辺りで不審者が出るというのは聞いてないがニュースを見れば犯罪が起こっていない日は無い。最近では『死んでたと思ってた友人を見た』『ドッペルゲンガーを見た』などとオカルトじみた話しを聞くくらいだ。

ケータイを肩に担いでいたボストンバッグにしまい、歩く速さを上げ、時折後ろを見る。大人はまだ見えた。

「……ィズゥ……」

後ろの大人から聞こえた微かな声。恐怖を感じながら見ると大人の体が変貌していた。身体は急に一回り大きくなり、頭頂部にはさっきまで無かった角のようなシルエットが浮かぶ。

「ファイズゥ！」

今度ははっきり聞こえた。『ファイズ』という言葉。それが何か知らない女子高生は遂に走り出すが右足から一歩踏み出した瞬間、何かに足を滑らせ、正面に転んでしまう。

腕を使って体を起こすが、右足首から強い痛みが神経を通して脳に伝わる。どうやら足をくじいてしまったみたいだ。右足首をさすりながら後ろを振り向くとビルの勝手口の安全灯が照らす場所。そこに“ヒト”はいなかった。いたのは“灰色の異形”。姿は頭に一本の角のようなものが生えており、手や足の先は“灰色の異形”の腕や腿より一回り太い。サイに似ている。

女子高生は制服のプリーツスカートが汚れる事も頭になく、尻を地面に着けたまま腕と足を使って後ずさる。助けを呼びたいが恐怖で声が出せない。

“灰色の異形”は腕を女子高生に向かって真っすぐ伸ばす。一本の指がビデオの早送りで見る蔓が伸びるように、時にしなりながら伸びていく。

ゴオオオオッ！

両者の耳に入るジェットの噴射音。しかしそれは飛行機の発する音よりはるかに小さく、耳を塞ぐほどの大音量では無い。

突然“赤いナニカ”が“灰色の異形”に何度もぶつかると“灰色の異形”は二、三メートルほど後ろに吹っ飛ばされる。

「おばあちゃんが言っていた……」

女子高生の後ろ。“灰色の異形”の向かいから若い男の声が路地裏に響く。

「男がやってはいけない事が二つある。食べ物を粗末にする事と、女の子を傷つける事。だってな」

キュイイイッ！

音声を発した“赤いナニカ”が若い男の手に握られる。男は別の安全灯の下に入り、その姿がはっきり見えた。

顔つきからして二十代前半。黒いくせっ毛の髪。スーツ風の黒い上着の下に白いシャツ。下は膝の部分が擦れたダメージGパンに革靴。だが腰のベルトが異様だった。銀色の光沢を反射する金属製の、重厚感のあるベルト。

『そのベルト、貴様がファイズか！？』

「ファイズ？　違うな。俺は天の道を行き、総てを司る男。天道、総司」

男、天道総司は右手に掴んだ“赤いナニカ”。メカ昆虫、カブトゼクターを左肩まで持ち上げ、静かに告げる。

「変身」

『ＨＥＮＮＳＩＮＮ』

天道総司がカブトゼクターをベルトのバックルに右から差し込み、左のストッパーに止まるとベルトを中心に全身を銀と赤の装甲が包んでいき、頭部をマスクが被うと装着完了。と、示すかのように顔の部分全体の青い複眼が光る。額のＶ字型の触覚が蝉を連想させる。その姿は旧渋谷区に落下した隕石。それに紛れて地球に来た地球外生命体“ワーム”。ワームに対抗するための秘密組織“ＺＥＣＴ”。ＺＥＣＴが開発したマスクドライダーシステム第一号。仮面ライダ

ーカブト　マスクドフォーム。
女子高生はいっぱいいっぱいになったためか意識を失う。“灰色の異形”は女子高生を飛び越え、そのまま自由落下を利用して右手で殴りかかる。
天道総司……いや、カブトはその攻撃をいなして“灰色の異形”を自分の後ろへ送り込む。反撃しなかった理由は女子高生の位置にある。反撃して女子高生に危害が加わるような事態を回避するためだ。
背中を見せた“灰色の異形”にカブトが歩みよると“灰色の異形”は格闘技を習った者が振るう拳、ではなく喧嘩のように勢いとがむしゃらにパンチを繰り出すがカブトは全てを片手で弾き、カウンターの拳を顔やボディに的確に当てていく。

「クソオオオオ！！」
「そうか、お前は“オルフォノク”か」

相手の攻撃にカウンターを当てながら“灰色の異形”を“オルフォノク”と言ったカブト。
オルフォノクとは人間の進化一つの姿と言われ、オルフォノクの共通項は『一度死んだ人間』である。
自殺であれ他殺であれ死んだ際にオルフォノクの因子が作用して生き返り、人間の姿とオルフォノクの姿になれる。人間との違いが顕著に現れるのは身体能力の違いだ。
「ならば教えてやる。俺の進化は光りよりも速い。全宇宙の何者も俺の進化には追いつけない」
カブトはどこからか、カブト専用の携行武器、カブトクナイガンを取り出して右手でグリップではなく“銃身を持つ”。
カブトクナイガンは形状は銃だが三つの使い方がある。一つ目は

名前の通り“銃”。二つ目は今のよう銃身を持つ事でグリップの底に付いた刃面が二〇〇度を超える高温の“斧”、“アックスモード”になる。三つ目が銃身を引き抜く事で名前にある“クナイ”になる“クナイモード”。

カブトはクナイガン・アックスモードでサイオルフォノクに切り掛かる。上から振り下ろし、横に薙ぎ払う。皮膚が厚いサイオルフォノクだけあって防御力も高いのだがアックスモードのクナイガンの切れ味はそれに阻まれる事なくダメージを与える。

「ハアッ！」

カブトがサイオルフォノクの左脇腹から右肩に切り上げるときりもみ回転をしながら吹っ飛ぶ。

カブトはクナイガンのグリップを持ち、アックスモードから銃に切り替える。銃身から赤外線の光りが三点、サイオルフォノクの胸部を捉えた。サイオルフォノクは自分が狙われている事に気がつき、起き上がろうとするがその瞬間、カブトクナイガンの引き金は引かれ、一発の光弾が胸部に当たる。

「ファイ、ズゥゥゥゥゥゥゥゥゥ……」

サイオルフォノクは怨みの声を発しながら青い炎を噴き出して灰になっていく。

カブトはクナイガンを手放し、夜の天に向かってゆっくりと右手の人差し指を立てて指す。それは勝者に与えられた権利だった。

……

……

……

「う、う〜〜〜〜ん……」

気を失っていた女子高生が目を覚ました頃にはくせっ毛の男も怪物もいなかった。――なんで？　と、思いながらも女子高生はケータイの液晶を見る。

「やばっ、もうこんな時間！？」

時刻は一日の終末にさしかかろうとする時間帯。女子高生は急いで鞄を拾い、帰路を駆ける。

女子高生が去った後、物陰から女子高生と同世代くらいの男子高校生が現れる。

「あれが太陽の神、カブト……人類を救世した者……」

男子高校生は怪物だった灰の塊のそばで手を翳す。すると辺りは光りに包まれ、状況が見えなくなった。

555つの顔　333の気持ち

私立スマートブレイン学園。かつてこの国を代表するほどの大企業だったスマートブレインが運営する高等学校で卒業生の多くは高卒、又は大卒を経てスマートブレインに入社し、輝かしい実績を納めていった。だが最近スマートブレインの前社長、木場勇治が。その指導者で社長経験のある花形。前々社長の村上ら三人が死亡、行方不明となっている。

閑話休題

ここ、スマートブレイン学園に通う十七歳の少年、尾上タクミ。先日の事件で見ずからの正体がオルフォノクであると知られるが同時に学園を守っていたファイズであると理解された少年。

事件直後は一部の生徒を除いて彼を腫れ物のように見ていた他の生徒達だったが徐々に受け入れられ、彼を疎む生徒は少ない。

「タ〜ク〜ミ、おっはよう！」

「うわっ！」

警備員がいる校門を抜け、敷地へ踏み出した瞬間後ろからハイテンションな挨拶と共に与えられた衝撃。体勢を前のめりにし、担いでいたナップサックを落としてしまいそうになるが何とか堪える。

「由佳は朝から元気だね。いい写真でも撮れたの？」

「わかる。途中猫が鼻提灯膨らませててたさ。見る？」

タクミの所属している写真部の部長で夢は写真集を出す事。愛用のカメラはインスタントカメラなのですぐに現像される。

由佳はポケットから一枚の写真を見せる。そこには草の上でトグロを巻きながら寝ているキジ猫が写っていた。

「たっちゃん。おはよう」

「あ、啓子さん。おはようございます」

タクミに挨拶したもう一人の女子生徒。名前は菊地啓子。写真部ではなく家庭科部の部長で被服のコンクールで最優秀賞を取った先輩だ。

彼女の艶やかな黒髪が風に揺れるたび、同性から羨望の視線が向けられる。

「ところでたっちゃん。最近はどう？　ちゃんとご飯食べてる？　惣菜や外食で済ませてない？」

「毎日自炊してますから」

啓子の美点である世話焼き。お節介な言い方ではなく相手の事を思っての言い方と性格、端麗な容姿のため相手に不快感を与えた事はない。だが彼女がここまで気を使うのはタクミ以外にいないらしく、周囲は『菊地啓子は尾上タクミが好きなんだ』と噂が立っている。

もちろんこの噂はタクミの耳にも届いている。だが彼女は普通の人間。自分と同じオルフォノクではない。という思いもあれば彼も年頃の男子。異性と付き合えるなら付き合いたい。という二つの気持ちに葛藤して内気な彼は悩んでいた。

そんな彼の悩みにも関係なく、校内放送が鳴る。木琴の音や鐘の音を電子化したものではなく避難訓練に使われるチャイムだ。

『西地区にオルフォノクとアンデッドが出現。生徒の皆さんは体育館に避難してください。繰り返します……』

「タクミ！」
「うん。行ってくる」
「啓子先輩、わたし達も！　――あれ？」

タクミは体育館へ避難する皆とは逆方向。自転車置場に置いてある専用バイク“オートバジン”の元に向かう。
それを見届けた由佳は啓子と一緒に避難しようとするが当人はいなかった。

◇◆◇◆◇◆

西地区の海浜公園。かつて鳴滝がディケイドに変身できなくなった門矢士を抹殺しようとした場所。そこでオルフォノクとアンデッドは争っていた。
片やヤスデに似たオルフォノク。ミリピッドオルフォノク。
片やギラファクワガタの祖たる金色のアンデッド。ギラファアンデッド。

「虫ごときが私達オルフォノクを差し置いて優勢になろうとは！」
「アンタ達オルフォノクなんて。我々アンデッドから見れば少々力を得た人間。足掻いたとて勝者はアタシさ！」

ミリピッドオルフォノクは手に持つ鞭で攻撃するがギラファアンデッドの硬い甲殻には僅かな傷しかつかず、ダメージが与えられない。
対するギラファアンデッドは強力な二刀の剣を振るえずにいた。

というのもヤスデはムカデとは違い、牙に毒は無いが体液には毒がある。どれほどの強さの毒か解らないため、迂闊に攻撃して毒を浴びれば弱ったところを他のアンデッドに狙われ、封印。このバトルファイトで負ける危険性も高まる。

「グギュルルルル……」

両者の戦いに加わろうとする新たな怪人。ワームだ。本来の目的はネイティブの抹殺だが彼らにとって居心地の良いこの地球は欲しいもので先に上げたように、オルフォノクとアンデッドは人類やネイティブに次ぐ邪魔な存在だ。

サナギを思わせるずんぐりとした体格の緑のワーム。ワームサナギ体。サリスワームとも呼ばれるワーム達の兵隊だ。二体のサリスワームの後ろにはサリスワームから脱皮した、一体のクモのワーム。アラクネアワームがおり、アラクネアワームがミリピッドオルフォノクとギラファアンデッドを指すと二体のサリスワームは突撃していく。

ここに三者の怪人の地球をめぐる戦いが始まった。

……

……

……

二体のサリスワームがミリピッドオルフォノクとギラファアンデッド。それぞれにトドメの一撃を受け、体表と同じ緑の爆炎を昇らせて消滅した。だがアラクネアワームにとってサリスワームは消耗

品なので悔やむことも無い。アラクネアワームは腰を落とし、両手を大きく広げた後、目にも映らない　高速移動を始める。サリスワーム以外の全てのワームが有する能力、クロックアップだ。このクロックアップに対抗するには同じクロックアップを有するカブトの世界のライダーと一部のライダーだけだ。

ミリピッドオルフォノクとギラファアンデッドには対抗手段が無いため、瞬くまに殴られ、蹴られ、吹き飛ばされ、限界までダメージが蓄積していく。

ミリピッドオルフォノクはオルフォノクの状態を維持するのがやっと。

ギラファアンデッドは封印可能を示す腰のバックルが開きそうになるのを感じた。

アラクネアワームは再びクロックアップに入ろうと先程と同じ構えをとる。必要なタキオン粒子が身体に満ちていくのを認識したあと、一歩を踏み出そうとする。

「ガアアアアアアア！！」

しかし背中から衝撃がきてミリピッドオルフォノクとギラファアンデッドの方に吹き飛ばされてしまい、クロックアップに必要なタキオン粒子も散ってしまう。

三体の怪人は吹き飛ばした者の方を見るとそこには鋭角なライトが特徴的な一台のオートバイが止まっていた。

「アンタ、何者……？」

「貴様がファイズか！？」

オートバイから降り、被っていたヘルメットを取る制服を着た学生。タクミだ。腰には変身ベルト、ファイズドライバー。ファイズドライバーの右にはツールの一つ、ファイズポインター。左にはツ

ールの一つ、ファイズショットが既に添えられている。

「いや……」

タクミは右手でケータイ型変身アイテム、ファイズフォンを開き、『5』のキーを三回入力。

「僕は、仮面ライダーファイズだ！」

かつて訪れた旅人が言っていた『仮面ライダー』。その名前に自分が変身する『ファイズ』を加えて『仮面ライダーファイズ』。タクミはこの名前が似合う事を不思議に思いながら左上にある『Ｅｎｔｅｒ』キーを力強く押し、ファイズフォンを閉じて天高く掲げる。

【Ｓｔａｎｄｉｎｇ　Ｂｙ】

「変身！」

【Ｃｏｍｐｌｅｔｅ】

ファイズドライバーの中央にファイズフォンを差し、左側に九十度倒すとファイズドライバーから身体中に赤いライン。フォトンストリームが伸び、人工衛星からファイズのスーツが転送されて装着する。

黒いスーツに赤いフォトンストリームが映え、マスクはギリシャ文字の『Φ』をイメージさせる。仮面ライダーファイズだ。

タクミはファイズ用武器の使用に欠かせないミッションメモリーをファイズフォンからスライドさせて抜き取り、専用バイクのオートバジンのハンドルに差し込む

【Ｌａｄｙ】

ハンドルを抜くと手元側から筒が伸び、筒内にオルフォノクの苦手とするフォトンブラッドが満たされる。ファイズ専用の剣、フォトンエッジだ。
タクミ……いや、ファイズは三体の怪人に向かっていく。

「ッ！」

一体目のアラクネアワームを腰を落とし、ファイズエッジを右へ振って薙ぎ払い。

「キャアッ！！

二体目のギラファアンデッドを袈裟斬りで左後方に。

「ウアアアアッ！」

最後にミリピッドオルフォノクを突き飛ばす。
ファイズはドライバーに挿したファイズフォンを開き、再びＥｎｔｅｒキーを押す。

【ＥＸＣＥＥＤ　ＣＨＡＲＧＥ】

ファイズギアから圧縮されたフォトンブラッドが腹、胸、肩、腕、手を通してファイズエッジのミッションメモリーに送られる。
ファイズエッジを振ると拘束用フォトンがミリピッドオルフォノクを捉えて浮かせる。ファイズは攻撃も防御もできないミリピッドオルフォノクわ思うままに斬っていく。

「ヤアアアアアアアアアアアアアア！！」
「ウワアアアアアアアアアアアアアア！！」

最後に力強く袈裟斬りをするとミリピッドオルフォノクは断末魔をあげながら灰になっていき、その場所には赤い『Φ』の紋章が浮かんだ。

ファイズが後ろを振り向くとアンデッドとワームは既に姿を消していた。タクミはファイズフォンを抜き取りＥｎｔｅｒを押すとファイズの変身が解除される。

ファイズギア一式をスマートブレイン社のロゴが入ったアルミのアタッシュケースに仕舞い、オートバジンのハンドルを差し戻し、エンジンを点けて疾走。その鮮やかな早さに時間は五秒とかからなかった。

「……」

それを影から見ていた一人。黒いスーツに白い――ブライトカラーの――フォトンストリームが特徴の仮面ライダーデルタ。オレンジ色の複眼は不気味なまでの静けさを、しかしその身体全体は異様なまでの凶々しさを発していた。

555つの顔　333の気持ち（後書き）

設定が生かされないヤスデオルフェノク。体液はフォトンブラッドに分解されました。
ギラファアンデットは原典ではなくリ・イマジです。人間態は『ちょっとHなお姉さん』です↑これが作者の欲望だ！！むしろこのためにこの作品を作ったと言ってもいい！！（マテコラ）

次回は原典×リ・イマジ陣！
出演はアギト、カブト、オーズ！

更に番外ギャグ短編『ライダー祭り　～セイヤッ！　セイヤッ！　セイヤアアアアアア！！～』を製作中！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8646y/

仮面ライダーVS仮面ライダー　原典×リ・イマジネーション

2011年11月26日23時48分発行